

日本人作家とノーベル文学賞

——スウェーデンアカデミー所蔵の選考資料（1958～1969）をめぐって——

大木 ひさよ

今回の資料紹介は、日本人作家が選考の視野に入つた1958年から、川端康成が受賞した1968年度、およびその翌年1969年度までのものである。

スウェーデンアカデミーのアーカイブ資料は、その全文がスウェーデン語で表記されているものを、稿者（大木）が日本語に訳し紹介する。

又、アーカイブ資料の記述については、選考議事録の資料から、日本人作家へ向けられた全谷を、基本的にアーカイブ記載そのままの文章構成（段落や、マス目空け等）^{注1}にしてある。

日本人作家を対象としたコメント（選考議事録）

1958年 谷崎 潤一郎

「選考委員会のコメント」

8) 谷崎の作品は、ヨーロッパの幾つかの言語に翻訳されている事などから、作品の知名度が上がって来たうえに、現在の日本文学界の中でもリーダー的な存在である。その中で、最も有名な作品は家族問題を取り上げた『Systarna Makioka』、『蒔岡姉妹』だろう。戦前から戦後にかけて、谷崎は母国の日本の習慣と社会変化、例えば国際化が進みつつある日本が、日本の古い伝統をなくし始めている様子などを鋭く観察し、それを作品に反映させている。谷崎は、深い知識のある自然主義派でありながら、心理的な側面から物事を観察している。スウェーデン語に翻訳されている小説『Några föredraga nåsior』、『蓼喰ふ虫』は、素晴らしい作品であると言える。ここでは、日本の現実が繊細さとセンチメンタリズムに覆われて描かれている。我々は彼の芸術家としての観察力を評価している。委員会はこのような理由から彼の推薦を承認するものの、今のところは、彼をノーベル受賞作家としてさらに上の段階まで推薦することはない。

「稿者の注釈」

議事録には、各作家の名前の前に番号が付けてある。例えば、1958年度のアーカイブでは、谷崎潤一郎には、8番がついていた。

Systarna Makiokaと、アーカイブ中では、スウェーデン語記であるが、これは『蒔岡姉妹』（『The makioka sisters』1957年英訳）のことである。

又、このコメントにある『蒔岡姉妹』とは、『細雪』のことである。本来の日本語での題名が『細雪』であるのに、翻訳された時はそれが何故『蒔岡姉妹』に変わっていたのだろうか。この小説の内容は、蒔岡家の四姉妹について描かれているため、翻訳者（サイデンステッカー）が、小説のポイントをさらにわかりやすくするために『蒔岡姉妹』（『The makioka sisters』1957年）にしたのではないかと考えられる。そしてこれがある意味、当時の翻訳の仕方にも関連するのではないかと考えている。

コメントの後半にある、Några föredraga nåsior（スウェーデン語直訳では、「数名はイラクサを好む」となる）とは、スウェーデン語記であるが、これは『蓼喰ふ虫』のことである。

谷崎の作品の中で、当時スウェーデン語に翻訳された作品

が、現在アカデミーの図書館に残されている。ちなみに、一番最初のスウェーデン語訳は、1955年の『蓼喰ふ虫』（ニールス・フレドリックソン訳）である。

1958年 西脇 順三郎

「選考委員会のコメント」

11) ノーベル賞を受賞するだけの資料となる、翻訳された作品がなかった。

1959年 日本人のノミネート作家なし

1960年 西脇 順三郎

「選考委員会のコメント」

57) 西脇 順三郎は、東京大学のサンスクリット語の教授である、辻 直四郎氏からの推薦を受けた。

この66歳の日本の詩人である、西脇順三郎は、モダニズム的な作風の詩を作るパイオニア的な存在である。しかしながら、翻訳されている作品が少なく、彼の作品をもう少し評価するだけの資料が足りないので、今回はノミネートか

ら外すしかない。

「稿者の注釈」

西脇順三郎の名前は、以前にも挙がっていたにも関わらず、毎回「翻訳作品の少なさ」の理由により、選考から外されている。当時の翻訳者の人数や質などから考えても、起こりうる事ではあるが、最近までノーベル文学賞受賞者リストに偏りのある（欧米や英語圏中心）ことが理解できると思う。

又、西脇順三郎を推薦していたのは、Naoshiro Tsuji: 辻直四郎氏であった。

辻 直四郎（1899年—1979年）とは、日本の古代インド学者（サンスクリット学）であり、言語学者であった。東京都出身。府立一中、一高（一高時代の同級生に、川端康成がいる）を経て、東京帝国大学文学部を卒業。1942年、東京大学教授。1950年、東京大学文学部長。1960年、慶応義塾大学語学研究所教授。1961年、ユネスコ東アジア文化研究センター所長。1965年、東洋文庫長、1974年、東洋文庫理事長に就任。1953年、日本学士院会員に選任される。1978年、文化功労者になる。辻直四郎氏は、1958年〜1967年の間に、計7回にわたり、詩人の西脇順三郎をスウェー

デンアカデミーに推薦している。(参照 公益財団法人
東洋文庫(2013年度版))

1960年 谷崎 潤一郎

「選考委員会のコメント」

59) 谷崎 潤一郎は、シーヴァッチ (Sivertz氏) らの推薦を受けた。

Herr Osterling エストリング氏

谷崎潤一郎に関しては、ヨーロッパやアメリカの作家と比べると、その作品のレベルが少し落ちるように思う。彼の代表作である、『蒔岡姉妹』の人物描写は悪くはないが、作品全体を考えると、『言葉使いなどが、重すぎて潤いに欠けるように思われる。日本は現在、近代的なものを求めている作品のテーマや物語は興味深い。しかしながらその言葉使いや表現が、それに伴っていないように思われる。(谷崎を推薦した、Sivertz氏は谷崎に対してはコメントを残していない。)

「稿者の注釈」

1960年度の資料によると、西脇順三郎は最終候補には残っていなかったが、谷崎潤一郎は、最後の5人の中に

入っていたことが判明した。この年のランク付けは、1、サンジョン・ペルス (Saint-John Perse) 2、アンドレ・マルロー (André Malraux) 3、イボ・アンドリッチ (Ivo Andrić) 4、ハインリッヒ・ボー (Heinrich Böll) 5として5番目に、谷崎 潤一郎 (Junichiro Tanizaki) である。

これらの最終段階に残った、他の作家へのコメントと谷崎へのコメントを比べると、谷崎氏へのコメントは一つしかないのが、5人の中では受賞する可能性が低かったとも考えられる。

例えば、三番の Ivo Andrić (イボ アンドリッチ) に対するコメントは、その評価が高いことが窺える。

それは、四人もの審査員が彼に対するコメントをつけている。

またエストリング氏は、この年の受賞者候補の中での特に高い可能性として(この5人の中で)、次の作家2人を挙げている。

1、Ivo Andrić イボ アンドリッチ

(1961年にノーベル賞受賞)

2、Saint-John Perse サンジョン・ペルス

(1960年にノーベル賞受賞)

1961年 川端 康成

「選考委員会のコメント」

40) この日本人作家の作品は、心理描写と芸術描写に優れた技術が見られ、上手くそれらが表現されている。これらは、ヨーロッパの自然主義に影響を受けた彼の同時代の日本人作家数名の中でも、抜きん出ていて我々を魅了するものがある。特に、彼の作品の中でも、彼特有の表現力を持つて描かれた作品は『千羽鶴』であると思う。しかしながら、翻訳された今までの作品数が少なすぎるために、現在の状態ではノーベル賞を授与するに相応しいかどうかを決める事は出来ない。よって、もう少し延期して考察すべきである。

「稿者の注釈」

『千羽鶴』(Tusen traor) は、1959年に初めてサイデンステッカー訳の英文で世界に発表された。それ以前には、『伊豆の踊子』(The Izu Dancer) や『雪国』(Snow County) が、1955、1956年に同じくサイデンステッカー氏によって翻訳されていた。しかしながら、アカデミーでは『千羽鶴』に感銘を受けたとしている。

1961年 西脇 順三郎と谷崎 潤一郎

「選考委員会のコメント」

55) 西脇と、56) 谷崎は、東京の日本作家協会から推薦を受けているが、残念ながらあまりにも彼らの作品に関する情報が少なすぎるので、今回は評価することが出来ない。しかし、もし現在の資料の中から彼らの作品を評価するとすれば、今のところ賞に値するとは言えない。

「稿者の注釈」

1961年に初めて、川端の名がボードに挙がったがその後、他の日本人作家への興味が薄らいできてくるようである。

コメントに記載されている、Japanska Författarforeningen, Tokyoは、そのまま直訳し、東京・日本(Japanska)作家協会(Författarforeningen)と訳した。これは、日本ペンクラブなのか、もしくは日本文藝家協会のことを指すのか、稿者(大木)としては、いずれか決めかねる。

「議事録最後の、全体へのコメント」

今回も問題なく推薦者を受け取った数は、全部で56名であり、各国さまざまな作家の名が挙がっている。その内、今年初めて推薦されたのは12名である。

「稿者の注釈」

川端康成は、その12名の内の1名であった。

谷崎、西脇は、1961年の段階で、3度（1958年、1960年、1961年）と議事録に名が載っていた。しかしながら、この時点では、日本人のどの作家も最終リスト5名の中には入っていない。

1962年 谷崎 潤一郎と川端 康成

「選考委員会のコメント」

15) 谷崎と、16) 川端への推薦は、委員会からの意向により、結局最終リストに載せる事は出来ない。若い方の川端の詩的な作品スタイルは、確かにオリジナリティーがあり、芸術的な要素がある。それには、日本らしさを感じることが出来る。一方の谷崎の作品は、『時岡姉妹』に見られるように、自然主義の親戚のような小説ではあるが、これは西洋文学の影響を大きく受けていると言える。『時岡姉妹』をはじめ、彼の作品は往々にして西洋文学の影響を強く受けている自然主義小説である。

「稿者の注釈」

川端の描く（日本らしさ）に対して、谷崎が描いた世界

を、（西洋文学からの影響）と解釈されていたことは興味深い。これらのコメントから、川端の日本描写は審査員を強く惹きつけていたと言える。又、通常アカデミーのボードに挙がってから、受賞までは数年、時には数十年かかる」とされている。

1962年 西脇 順三郎

「選考委員会のコメント」

37) 日本人作家、西脇の近代的な詩は、このノーベルアカデミーの水準に達しているとは思えない。

「稿者の注釈」

毎年、東京大学の辻教授から西脇順三郎に対しての推薦状がアカデミーに送られていた。アカデミーで閲覧出来る推薦状の内容には、「西脇順三郎が日本人の中で一番ノーベル賞を受賞することが相応しい作家であると、理解していただければ嬉しいです。」と言う内容であったが、アカデミーではそのように評価をしてはいなかった。

1962年度の日本人作家への推薦は、次の推薦者、並びに団体からであった。

谷崎潤一郎 推薦 ハーバード大学・ヒビット教授

川端康成

推薦

日本ペンクラブ

西脇順三郎

推薦

(Japanska penklubben)
日本アカデミー (Japanska
akademien)・辻直四郎氏

1963年

川端 康成

「選考委員会のコメント」

38) 今年は、4人日本人作家の候補者がいるが、彼らの作品を十分に考察する、こちらの判断材料となる資料／知識が欠けている。又、この4人の中で、特に川端の作品が一番評価出来るとも現時点では言えないので、今年には川端をこれ以上推薦することは出来ない。

1963年

西脇 順三郎

「選考委員会のコメント」

53) ドナルド・キーン教授からの意見に従い、西脇をこれ以上推薦しないことにした。

「稿者の注釈」

このコメントにあるように、アカデミーは、ドナルド・

キーン教授(1922)の意見に従って、推薦基準を決めていることが解った。この年の資料閲覧(2014年1月)で一番大きな収穫となったのは、アカデミーが、日本文学についての専門家を2名決めて、その専門家からの意見を重視していたことである。これは、1963年度の資料を注意深く読み進めてくうちに、判明した。

その専門家2名とは、ドナルド・キーン教授(ニューヨーク コロンビア大学/日本語学教授)と、エドワード・サイディンステッカー氏(三島/川端文学の翻訳者)である。

1963年

谷崎 潤一郎

「選考委員会のコメント」

72) 今まで一度も、日本人作家に賞を授与したことがないので、是非とも日本文学者に賞を与えたいと思っっている。多くの日本人は、谷崎を日本文学界の中心的な存在であると考えているようであるが、我々はそれに反して彼の作品はまだ賞を得るほどのレベルに達しているとは思っていない。

1963年 三島 由紀夫

「選考委員会のコメント」

46) 専門家からの意見である、「三島には将来性がある」という事を考慮すべきであると思う。一番最近英訳された作品の『宴のあと』を読むと、彼の技術的な才能を認識させるには十分である。しかし、その作品からは、どちらかと言うと文学性よりもジャーナリズムが感じ取れる。又、この最新作によって、彼の業績をさらに押し上げた、とも思えない。

とにかく、今後もこの作家の作品をもっと追跡する必要がある。なぜなら、この4人の日本人作家の中では、三島がノーベル賞を取る可能性が一番高いと思われるからである。

「稿者の注釈」

1963年の議事録には、エステリング選考委員長からのコメントとして、三島がノーベル賞を取る可能性が大きいと書かれていた。

しかし、結果的には川端が、三島の在命中である1968年に受賞した。この主な理由は何であったのか。又、『宴のあと』の翻訳者が、委員会が定めた日本文学専門家の一人であるドナルド・キーンであったことも、興味深い。

1964年 川端 康成

「選考委員会のコメント」

35) 日本文学に対してのディスカッションは行われたが、専門家からの強い推薦がなく、特に川端に対して強い反応がなかったので、今回はこれ以上ノーベル委員会が彼を推薦することは出来ない。

「稿者の注釈」

川端が受賞した1968年から4年前のコメントでは、特に委員会が川端を重視しているとは思えないことが窺える。

1964年 三島 由紀夫

「選考委員会のコメント」

47) 日本文学の専門家によると、三島には将来性があるようなので、もう少し後で検討しよう。

「稿者の注釈」

アカデミーが所有しているアーカイブによると、日本文学スペシャリストとは、先に触れたドナルド・キーン教授)と、エドワード・サイデンステッカー氏であった。

1964年 西脇 順三郎

「選考委員会のコメント」

53) 彼への推薦は、去年却下された。

「稿者の注釈」

スウェーデンアカデミーからの支持は毎回低いが、議事録の中に数年間（1958年～1967年）に亘り名前が挙がっていたのは、毎年日本からインド文学研究者の辻直四郎と、日本作家協会（1961年）と日本アカデミー（日本学士院）1963年が推薦状を送っていたからである。

1964年 谷崎 潤一郎

「選考委員会のコメント」

67) 日本文学の専門家が、今回この作家を特に強く推薦した。日本人候補者の中では、第一人者としている。しかし、彼の技術は頂点であるとは思えない。同時に、『蒔岡姉妹』の英語訳を読んだ。又、この英訳では、谷崎の美学や感性、又その文体が上手く伝わっていない、という指摘があった。だが、最近翻訳された短編小説集『Seven Japanese Tales』では、谷崎の芸術家としての文体が上手く伝わって来る。しかしながら、同時に、彼の作品にあるマゾヒズムは、西

洋人の読者には受け入れられにくいと思う。

「稿者の注釈」

この時点では議事録を読む限り、谷崎がノーベル賞を取る可能性が日本文学者の中では高いと言えよう。しかし、翻訳の問題が指摘されていた。ちなみに、1957年に『The Makioka Sisters』として、エドワード・サイデンステッカーに、又『Seven Japanese Tales』は、^(注3)1963年にハワード・ヒビットにより英訳されている。

1965年 川端 康成

「選考委員会のコメント」

46) ノーベル委員会が依頼した、川端康成に関する調査(John Rohnstrom ヨーン ローンストローム氏による)では、谷崎潤一郎が亡くなってから、日本人作家の中では一番有力な候補者と言えるが、これから引き続き彼の文学に対する調査をする必要がある。又、現代において川端作品の翻訳された書物が少ないと言う事もある。

「稿者の注釈」

1964年度のコメントでは、谷崎潤一郎が一番受賞に

近いと言われていたが、谷崎の死により、状況が大きく変化

したことがはっきりと分かる。しかし依然として、川端への受賞に繋がるだけの翻訳がまだ少ないとされていた。

因みに、ヨーン ローンストローム氏とは、当時ストックホルム市にある王立図書館で、司書の代表として勤めていた人物でもあるが、1965年にアカデミーは、このローンストローム氏を日本に派遣して、候補者の誰が最も適切であるかを、日本での現地調査を実施した。

1965年 三島 由紀夫

「選考委員会のコメント」

53) (三島の文学に関する調査 (John Rohnstöm ヨーン ローンストローム氏による) によると、三島への受賞は今後の課題として考察したい。

「稿者の注釈」

この時点ですでに、三島が日本人初のノーベル賞受賞作家になる可能性は川端よりも低かったと言えるのではないかと思うが、三島文学への関心も強いことが分かる。

1965年 西脇 順三郎

「選考委員会のコメント」

59) (西脇に関する調査 (John Rohnstöm ヨーン ローンストローム氏による) による否定的な意見により、ノーベル委員会は、この日本人作家は候補に入れないことにする。

1965年 谷崎 潤一郎

「選考委員会のコメント」

74) この日本人作家は、最近死亡した。

「稿者の注釈」

1965年7月30日に谷崎が死亡していなければ、日本文学史の歴史は変わっていたことが予想できる議事録である。日本人作家の中では一番最初にノミネートボードに上がり、その文学性も高く評価されていた。

1966年 川端

「選考委員会のコメント」

33) ノーベル委員会のディスカッションはここ数年日本人の候補者について議論されているが、現在谷崎潤一郎が亡

くなった後では、川端康成が唯一、受賞資格のある作家と言える。ここに、専門家である伊藤教授からのコメントがある。これには、我々の望んだ評価内容が一部欠けていると言っている、これを読んだ上で川端が日本の中で最も素晴らしい作家であるということがわかった。もし、川端が選ばれた場合、日本の読者はそれに対して異議はなく、賛成するであろう。川端が、日本の国民の生活やモラル、美学を代表する事と、西洋の影響と異なる様子を持っている文学者であることが評価対象の一つである。それらは、『古都』の中で良く表れていて、最高レベルの作品である。これらは、繊細で上品であり、そこにはミステリアスな詩のようなニュアンスがこの小説の中にある。そのエレガンスな技法は西洋文学よりも繊細さという点で優れている。しかし、残念ながら日本語以外で読める川端の作品は限られているが、他の言語で読める作品は川端の素晴らしさを良く伝えている。

私が川端を第一の候補者にする理由は、作品のすばらしさは当然であるが、川端が受賞すると日本の国民は非常に満足するであろうということもある。しかし今回、私が彼を第一に推薦するのは、それが原因ではないが、その事も一部考慮している。私は下記の順位でノーベル文学賞を推薦する。

- 1、川端康成
- 2、S.J.Agnon-Nelly Sachs
- 3、Graham Greene
- 4、W.H.Auden.

「稿者の注釈」

エストリング選考委員長は、この年に川端へ長文のコメントと、推薦順位を述べていた。

又、アカデミーが依頼した、日本文学の専門家である、伊藤整氏を、アカデミーは、Professor Ito「伊藤教授」と記述している。これは、伊藤氏が、かつて東京工業大学で教授として勤めていた時の職名を使っていたことになる。

同時に、川端康成に対するコメントも残っている。この文章は全てスウェーデン語で記されていたものを、稿者（大木）が日本語に訳した。伊藤教授が書いた文章が、その後スウェーデン語に翻訳されてアカデミーに提出されたものである。

1920年代から、若い川端康成氏は第一次世界大戦後の西洋文学の感化を受けたが、彼の小説からはその影響がみられない。幼いころから日本の古典文学に造詣が深く、現在の作品に、その古典文学からの影響が認められる。しかし、川端の作品の中で一番重要なことは、彼の性格や生

い立ちが作品に現れている事である。

私を感じるには、彼は典型的な親のいない子供の性格を持ち合わせているかとも思うが、彼は貧しく育ったわけではない。又、彼の作品の中から彼の両親への憧憬が深く伝わってくる。

人生というのは、儂いものである。美しいものや本物の愛への思い出こそが人生で最も大切な物である。これは間違いない川端の価値観でもある。そしてこれらを彼の作品の中に描写しようとしている。その最も顕著な例としては、『雪国』の最初の章である。若い女性二人が電車の中に座っているが、一人がもう一人の若い女性をガラス越しに見ている場面である。川端は皮肉や現実を拒否するタイプではない。客観的で、平凡な描写は芸術の中では価値がない。芸術で最も大切なものは、本物の美や忠実な愛である。これはおそらく、川端の価値観であると思われる。文学の構成や文脈を見れば、川端の作品は時には大雑把にも見えるが、強調すべきことは、これらが日本の文学や芸術のなかで最もよく使われるテクニクであるとも言えることである。それは、全体の中からいくつかの部分を取り出し、それらを詳しく分析・描写し、それ以外の部分は大きくまとめる方法である。これは、例えば歌麿や広重の芸術作品の中にもみられるテクニクとも言える。これを知った上で川端の

作品を理解することは大切である。川端は、日本の古典文学と両親の死などから得た死生観を、上手く自分の作品の中に取り入れている。

谷崎潤一郎が亡くなったので、現在では川端以外に日本の文学を代表する作家として他の日本人作家を挙げることに出来ない。

川端康成の履歴書

1899年6月11日（ママ）大阪生まれ。彼の父、栄吉は医者であったが、川端が2歳の時に死亡。

母のゲンはその翌年に死亡。川端は盲目の父方の祖父に育てられた。その川端の祖父は彼が16歳の時に、姉もまた川端が10歳の時に死亡。それ以降、祖父が亡くなってから川端の母方の叔父が川端の面倒を見た。

1917年に東京の高校に入学。

1920年に東京大学の文学部に入学。これは、日本人の中で最も高いレベルの教育である。1924年にその東京大学を卒業。

作家としての道は1921年から始まった。『新思潮』という文学雑誌を友人と共に出し、その中に「招魂祭一景」を発表した。

1923年には、『文芸春秋』という利益目的の雑誌で、

小説と評論を執筆し、川端の師と言える菊池寛によって出版された。

1924年に、新しい文学雑誌である『文芸時代』を発刊した。第一次世界大戦後のグダイズムや未来主義に影響を受けた若い作家をこの中で紹介した。

1928年に『伊豆の踊子』を書き上げた。

その小説のモチーフは、学生時代の東京の西南にある山中にある温泉を探索した時の経験を基に書いた。

その小説は、浪漫主義で田園生活を描いたものである。大衆芸人家族の中の一員である若い女の子と主人公の恋愛を描写することにより、この小説は人気を得た。

川端は、これにより人気を得て有名になりその後、多くの文学作品を発表したが、これらはその中で最も大切なものである。

1933年 『禽獣』これは主人公が世話をした犬や鳥を描写している。ここでは川端自身の養子であったことの経験が出ています。

1937年 川端の代表作である『雪国』を完成したが、これを書き上げるのに2年半の年月を費やした。(英訳とスウェーデン語訳あり)

1948年 日本のペンクラブの会長に就任。

1952年 『山の音』『千羽鶴』を完成。これらの作品

を完成させるのにも約3年かかった。

1953年 日本アカデミーのメンバーとなる。

1966年4月11日東京

伊藤 整

「稿者の注釈」

谷崎潤一郎の死亡後、この年の議事録と日本文学専門家からのコメントにより、川端康成の受賞の可能性が大きくなったことが解る。同時に、アカデミーが日本の読者の事を考察し、川端の受賞がその点でも適当であると考えていた。尚、文中後半に記している、日本アカデミーと、日本学士院とは異なる。

1966年 西脇 順三郎

「選考委員会のコメント」

49) アカデミーが日本文学の専門家のコメントを読んだ上で、推薦を拒否した。

1967年 川端 康成

「選考委員会のコメント」

34) 谷崎潤一郎亡くなってからは、日本人作家の中では川端が候補の一番にあげられると思う。しかし、川端の作品すべてを把握するのは困難であるが、最近出たドイツ語訳の『古都』が、川端の高いレベルを表していると評価出来る。彼の作品からは、繊細さと謎めいたニュアンスが感じられる。また、詩歌などは、礼儀正しく伝統的なニュアンスがあり、このような観点からすると、ともすればヨーロッパの芸術が、川端芸術の陰に位置しているとさえ言える。

「稿者の注釈」

ここに記載された、「川端の全作品をすべて把握するのは困難であるが」とは、当時の翻訳作品の本数の問題であったと考えられる。

1967年 三島 由紀夫

「選考委員会のコメント」

41) 川端よりも年下の三島は多彩な才能を持っている。それらは、西洋からの影響を受けているとも言える。三島の英訳された最新の作品である『午後の曳航』は、港町で船乗りが何かの悩みを抱えている少年たちに殺されるといいう物語である。これは、フランスの作家である、アンドレジッドを思い出す。この作品の中で、殺人を描写する際に

は、無機質な感情を表現している。三島の多彩な才能は、これからも成長し続けるだろうと予測されるが、現時点では川端の方がノーベル賞にはふさわしいと思われる。

1967年 西脇 順三郎

「選考委員会のコメント」

46) この推薦者に対しては、すでに前回アカデミーが取り下げている。

1968年 川端 康成

「選考委員会のコメント」

37) この作家への去年の評価を参考にしながら、確信出来ることは、川端康成は、日本の文学界を代表する作家であると言える。

1968年 三島 由紀夫

「選考委員会のコメント」

47) 我々は、三島由紀夫の才能について、今まで何度も取

り上げてきた。この作家はこれからもその才能を伸ばして行くであろうことを予想できるが、今のところ完成されているとは言えない。

「稿者の注釈」

この年のアーカイブを閲覧すると、川端康成が受賞することは、すでに過去の評価に基づいてある程度決定されていたように読める。日本人作家が、アカデミーの選考資料に残った1958年から数えて、11年目にして初の日本人作家の受賞とその理由が明記された年である。同時に、最後まで川端康成と並んで評価を受けていたのは、三島由紀夫であったと言える。

1969年 井上靖

「選考委員会のコメント」

44) この推薦者に関しては、これ以上調査する必要はない。今、また新たに日本人へ賞を授与することはないと言えるからである。

「稿者の注釈」

この年には、三島由紀夫への推薦が挙がっており、日

本人作家へは、井上靖のみであった。しかしながら、これまでのアーカイブを読み進めていくと、推薦へのタイミングと年度が、受賞に大きく左右していたように思える。

又、今まで必ず川端康成、三島由紀夫、西脇順三郎と同時にボードに挙がっていたのが、川端康成の受賞と共に、三島と西脇の名前が消えていたのも興味深い。そこに、本年度初めて、井上靖の名前が挙がったものの、この年のコメントを読むと、日本人には既に去年授与したので、今年又新たに日本人作家を調査する必要がない、という言う意味のコメントがあることから、授与する国を毎年ある程度ばらつかせていたことになる。

次の日本人受賞者となった、大江健三郎（1994年）は、川端の受賞から26年後（1994年）であった。

注

(1) アーカイブ記載例

1958年度の谷崎潤一郎へのコメント

8) Junichiro Tanizaki. Den föreslagne betraktas som Japans ledande författare i våra dagar, och hans namn börjar nu bli känt genom översättningar till europeiska språk. Hans märkligaste verk torde vara den Brett anlagda familjeromanen: systemna Makioka. Han framträder här som en lysande observatör av seder och samhällstecken i

sitt hemland under den fortskridande krisen före och efter kriget, där all inhemsk tradition håller på att försvinna i den internationella smältugnen. Tanizaki arbetar som en vålskoad naturalist, men med fint sinne för psykologiska valörer och lokalkolorit. I hans även till svenska översatta " Några föredragna nåslosor", en roman i mindre format, är det artistiska greppet likaledes mäterligt, och den japanska verkligheten presenteras där i en slöja av ömt vemod. Kommittén bejgar sitt intresse för förslaget, men är icke beredda att fn. anbefalla detsamma.

(2) サン＝ジョン・ペルス フランス出身の詩人。1960年にノーベル文学賞を受賞。
イヴォ・アンドリッチ ユーゴスラビア出身の小説家。

1961年にノーベル文学賞を受賞。

(3) 『Seven Japanese Tales』1963年に英訳された短編集で、1910年～1959年までの7つの作品が収録されている。「刺青」(1910年)「恐怖」(1913年)「私」(1921年)「青い花」(1922年)「盲目物語」(1931年)「春琴抄」(1933年)「夢の浮橋」(1959年)